

講演会から

演題 認知症の人を地域で支える



県認知症シンポジウムがこのほど甲府市内で開かれ、千葉県旭市の単科精神科病院「海上療養所」の精神科医師・上野秀樹さんが「認知症の人を地域で支える」と題して講演した。

4人に1人

今年6月の厚労省研究班の発表によれば、日本には462万人の認知症患者がいて、さらに400万人の認知症予備軍の人がいるという。これは、65歳以上の4人に1人が認知症または

その予備軍という衝撃的な数字である。

認知症の症状は大きく二つに分けられる。一つはもの忘れや自分の周囲のことが分からなくなったり、理解・判断力が低下したりする「認知機能障害」と呼ばれる症状だ。これは介護

講師 上野秀樹さん

東京大学医学部卒業。都立松沢病院勤務などを経て、2008年から海上療養所勤務。精神保健指定医。内閣府障害者政策委員会委員。

保険サービスなどを利用した適切なケアで対応することが可能な場合が多い。これに対し介護現場で問題となるのは、もう一つの

メッセージを読み取って

の低下がある認知症の人は、環境変化で混乱しやすく、言葉で自分の思いを表現するのが苦手である。例えば、夫の急病で一時的に

く、高齢になれば誰でも認知症になる可能性がある。大切なのは認知症になってもそれまでと同じように生きがいを持ち、いきいきと暮らせる社会をつくることだ。認知症の人が暮らしやすい社会の実現、それは「普通の人」にとっても暮らしやすい社会の実現につながる。今年度からはじまった認知症施策推進5カ年計画

(通称オレンジプラン)の中で、厚労省は認知症初期

「行動・心理症状」といわれる症状だ。しまい忘れた金を「盗られた」と訴える「ものご忘れ妄想」や、実際にないものが見えたりする幻覚症状のほか、行き先が分からなくて徘徊したり、不潔行為、興奮や暴力などに発展することもある。

表現が苦手

息子宅で過ごしていた認知症の高齢女性が「どうにかしてくれ。殺してくれ」と大声を上げるようになり、家族が困り果てていたことがあった。ところが、認知症の人が出来ることをやりながら、残された能力を生かして共同生活するグループホームに入所したところ、この行動はひたりとやんだ。この女性は主婦とし

生きがい尊重

今このところ認知症には完全な予防法や治療法はなく、高齢になれば誰でも認知症になる可能性がある。大切なのは認知症になってもそれまでと同じように生きがいを持ち、いきいきと暮らせる社会をつくることだ。認知症の人が暮らしやすい社会の実現、それは「普通の人」にとっても暮らしやすい社会の実現につながる。今年度からはじまった認知症施策推進5カ年計画



本場のプロバンドも出演

カントリー&ウエスタンコンサート

5日 都留・戸沢の森林

住の会社員ら7人で結成し、年1、2回都の杜うぐいすホールで演奏会を開いている「ザ・サタデーナイト」や、大月市で10年ほど前から活動している「グラスカントリーボーイズ」、笛吹市を拠点と活動する



無職 利夫さん(68)



はぜい弱で、練習環境もよく頑張っている。子響を与え、孫のクラスでスクールに通う子もいすべて勝利し、来季もち続けてほしい。